

キノコ画と美人画

菊地 栄子

本郷次雄先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

千葉に本郷先生がお出でになり、千葉県立中央博物館の菌類講座や千葉菌類談話会の観察会が続日で行われ、先生を囲んで懇親会をやっていた頃のことです。私と矢部さんは、二日続けて川崎から来るのが面倒で本郷先生と同じ宿をとった時のことです。一次会、二次会、三次会はカラオケ会、本郷先生の十八番は「野崎小唄」や「隅田川」、とくに「隅田川」のセリフの大部分は大のお気に入りでした。帰りのタクシーに乗る先生と私たちに「明日は講座、先生を夜更かしさせないでくださいよ」と吹春先生の声が響く…。

宿に着くと先生はとてもお元気。「良いものを見せてあげよう」と云われる。その頃の本郷先生は、着替え、靴、カメラに三脚、講座の資料など、それはそれは大荷物を背負って来られていました。その大きなリュックから取り出されたのは、今年描かれたと云う数枚のキノコ画と一枚の美人画。キノコはハガキ程の画用紙に実物大で描かれ、一枚一枚丁寧にハトロン紙で覆われていました。

日本のキノコのバイブル書といわれる「原色日本菌類図鑑(保育社、今関六也・本郷次雄編著)」と同じキノコの生絵を目前にして私の胸はドキドキ、何をお聞きすれば良いのか。そんな私たちに本郷先生はキノコを描くために日本画を習ったこと、絵の具はお孫さんたちが使う水彩絵の具と同じ、筆は習字で使う細筆が使い易い事などを教えて下さいました。

“下書きなし”の毛筆で描かれた精密画。「傘の溝線、鬚の枚数に狂いはないのでしょうか？」私は失礼を省みず聞いてしまいました。即座に



本郷先生(中央)、矢部さん(向かって右)と共に

先生は「少しでも違ったら最初から書き直す。だから一晩で書き上げるのは一枚(本)か二枚(本)」。キズのないきれいなキノコを選んで労を惜しまず正確に描く事と云われました。私たちは先生のご苦勞でキノコの同定にどれだけ楽をさせて貰っていることでしょう。

ところでキノコ画といつも一緒にいる「美人画」が私は気になるのです。例えばシェフが料理の前に包丁を研ぐように、キノコのシーズンごとに筆研ぎ(慣らし)で「美人画」を描かれたのではないのでしょうか？ 髪形や頭部の曲線、一本一本丁寧に描かれた髪の毛は傘の輪郭・溝線・鬚描きに、首すじを描くさりとした線はキノコの柄に通じ色気さえ感じてしまいます。

キノコを覚える近道は描くこと、傘の上の附属物はもとより、鬚と柄の関係―離生・湾生・直生・上生・垂生、柄に纏わるツバやツボ等肉眼で識別出来ることを正確に描くことが覚える近道と、「キノコの絵を描いてごらん」、本郷先生の声が今も耳にのこっています。